

【特集】

とくしまコウノトリ物語

SDGS(持続可能な開発目標)達成を目指す人と自然



P6~P10/鳴門に飛来したコウノトリ・写真提供 * 認定NPO法人とくしまコウノトリ基金 ** * 三宅武氏 P6・P7/大谷川エコツアー・写真提供 *** NPO法人川塾

あなたは空を飛ぶコウノトリに出会ったことがありますか。かつて日本にいた野生のコウノトリは、昭和46(1971)年に絶滅してしまいました。絶滅を心配して昭和30(1955)年からコウノトリの保護増殖に取り組んできた兵庫県や豊岡市の長い地道な努力で初めて増殖(3羽のヒナがふ化し2羽が巣立ち)が成功したのは、コウノトリの人工飼育を始めて24年目、平成元(1989)年のことでした。

飼育コウノトリの放鳥を開始したのは、コウノトリの保護活動開始から50年目の平成17(2005)年。野生コウノトリによる自然増殖を目指して豊岡市から日本の空に放たれたコウノトリは平成27(2015)年、鳴門市にも飛来し、平成29(2017)年からは8年連続で鳴門生まれのコウノトリが誕生しています。

一度絶滅したコウノトリが今、鳴門で巣づくりをする背景には自然界の大きな循環と人々の努力があります。SDGs達成を目指す認定NPO法人とくしまコウノトリ基金の関係者の方々の話を中心に、コウノトリにまつわる人々と自然の物語をお届けします。



認定NPO法人とくしまコウノトリ基金

コウノトリやナベヅルなど希少鳥類とその生息環境の保全活動、さらにその活動をおこなって地域の社会経済を元気にすることを目的に2019年に発足した。

事務局Ⅱ〒771-0203

徳島県板野郡北島町中村字岸ノ上1-288

TEL 090-2825-6721

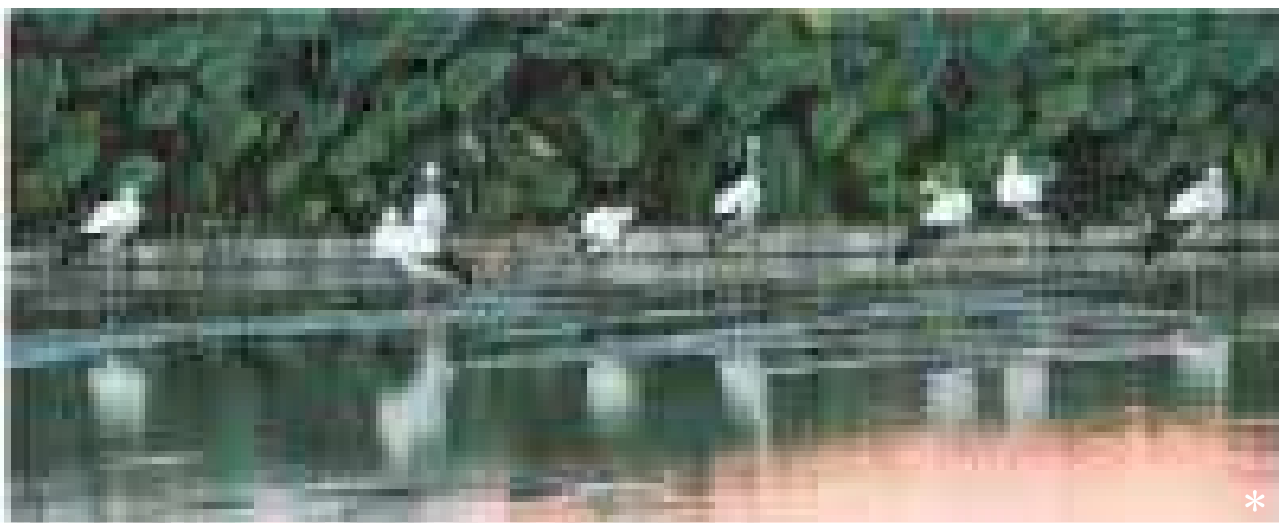
活動拠点・大谷ベースⅡ〒779-0302

鳴門市大麻町大谷字八反田

参考資料・兵庫県立コウノトリの郷公園ホームページ・認定NPO法人とくしまコウノトリ基金活動レポート『ゆりかご』

・徳島河川国道事務所発行『あわのくにコウノトリHANDBOOK』・公益社団法人土木学会発行『土木學會誌』第109巻第5号

序章 半世紀をかけ コウノトリ復活に尽力した兵庫県や豊岡市



早くからコウノトリの絶滅を危惧していた兵庫県と豊岡市、協力団体は昭和33(1958)年、コウノトリの増殖事業を開始し、人工巣塔を建て、「コウノトリをそととする運動」を展開した。しかし野生のコウノトリが相次いで死んでいく状況に、昭和40(1965)年、人工飼育ケージをつくり、つがいを捕獲して人口飼育で増やそうと試みたものの、農薬を含む水銀の影響を受けていたためヒナが育つことはなかった。

兵庫県豊岡市にある兵庫県立コウノトリの郷公園のホームページは、こうしたコウノトリにちなむさまざまな知識や情報を公開しています。

日本の空から完全に姿を消してしまつた特別天然記念物のコウノトリがどういう経緯を経て鳴門市に飛来することができたのか、同ホームページは次のように分かりやすくまとめて伝えています。

①絶滅が危惧され、昭和30(1955)年に保護活動が始まりました。

②昭和40(1965)年に人工飼育の取組が始まりました。

③昭和46(1971)年に日本の空を飛ぶ最後の野生コウノトリが死にました。これを野生絶滅と言っています。

④昭和60(1985)年にソビエト連邦(ロシア)から野生の幼鳥6羽を譲り受けました。

⑤ソビエト連邦(ロシア)から譲り受けた幼鳥の中から飼育コウノトリのつがいができ、平成元(1989)年に3羽のヒナがふ化し2羽が巣立ちしました。コウノトリの人工飼育を始めてから24年目にして増殖に成功しました。

⑥平成6(1994)年に、コウノトリ野生復帰計画が開始されました。

⑦平成14(2002)年には飼育コウノトリが100羽を超えました。

⑧平成17(2005)年に飼育コウノトリの試験放鳥が開始され、放鳥から野外コウノトリによる自然

繁殖に重点を移しました。

コウノトリの保護活動が始まってから50年目のことです。

⑨野外コウノトリの数は、平成17(2005)年から12年目の平成29(2017)年に100羽、15年目の令和2(2020)年に200羽、17年目の令和4(2022)年に300羽に到達しました。

こうした豊岡の尽力を経て、豊岡から巣立ったコウノトリは鳴門市以外(注1)にも飛来し、巣づくりをしています。

あなたのまちでコウノトリが

巣づくりをはじめたら

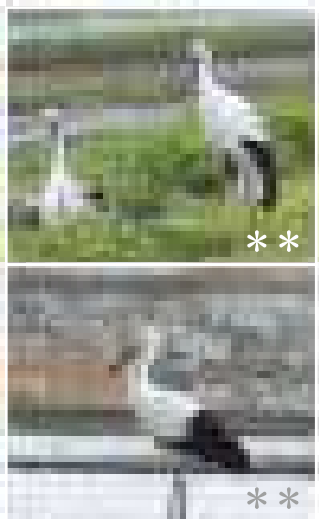
これはコウノトリとのつきあい方をまとめた兵庫県立コウノトリの郷公園が刊行する冊子のタイトルです。野生コウノトリの復活にかける豊岡の、コウノトリが日本の空を飛ぶ平和な日々、豊かな自然を大切にしたいという思いが伝わってきます。

兵庫県立コウノトリの郷公園

〒668-0081

兵庫県豊岡市祥雲寺128番地

TEL 07966-235666



(注1)2005年の試験放鳥以降、日本でヒナが産まれ育つたところのある場所は兵庫県5か所、京都府2か所、鳥取県3か所、福井県5か所、石川県2か所、茨城県2か所、千葉県野田市、栃木県小山市、島根県雲南市、徳島県鳴門市、香川県まんのう町、広島県世羅町、佐賀県白石町の26か所(2023年12月末現在)

第一章

鳥たちは壮大な世界を教えてくれる

徳島はエサを求めて地球規模で渡りをする旅鳥の出入り口
日本野鳥の会徳島県支部
前支部長・三宅武さん



三宅武さんは、今年4月、19年間務めた日本野鳥の会県支部長の役を後任にバトンタッチしたばかり。コウノトリの実態にも詳しく、野鳥の魅力などについて話を伺いました。

「もともとは高山植物に惹かれ、病院の検査技士だった仕事の合間に趣味で本州中央部の日本アルプスなどで花の写真を撮っていたので、ライチョウやホシガラス(注2)などを見かけることはありました」という三宅武さんを、20代後半で野鳥の世界に導いたのは、タヌキノシヨクダイ(注3)の発見者でもある植物同好会の阿部近一さん。博物同好会を野鳥、植物、昆虫、鉱物、水生昆虫などの専門分野に分けたい、ついでには野鳥の補助をしてくれないかと、組織づくりに誘われたそうです。

「植物と違い、変幻自在に飛ぶ動きの美しさ、光の当たり方で変化する羽色などは鳥ならではの魅力。オオタカ、ハイタカ、ハヤブサなど猛禽類の金色の眼を見たときには眼光の鋭さに見すくめられた感じになり、魅了されてしまいました」。以来、三宅さんのカメラは野鳥を追い続けることになりました。

「四国の東に位置する徳島は県外の野鳥愛好家

もつらやむ地域。上昇気流に乗り、エサを求めて地球規模で渡りをする鳥たちがやってくる絶好の場所。

鳴門海峡から蒲生田岬は旅鳥の出入り口なんです。例えば海峡を望む鳴門公園の展望台では風に乗り舞い上がってくる鷹も観察できる。「まれにポロツと偏西風に乗って大陸からやってきたコウノトリやナベツルに出会うこともありました」とも話します。

「コウノトリの主な繁殖地は東アジア。旧満州、アムール、ウスリー地方で繁殖し、寒くなるとエサを求め、暖かい中国南部(ボーンヤン湖)などに飛んで越冬し、暖かくなる頃に戻るいわゆる渡り鳥」。コウノトリはかつて日本では江戸時代まで普通に生息し、明治時代以降に環境の変化で減少した。また、「日本のコウノトリは留鳥です。日本に留まって生活をする」。世界には鳥が渡る大きなルートがいくつかある。渡りをする鳥たちを観察することで壮大な世界を教わりましたね」等々、三宅さんの鳥類話は思わず身を乗り出してしまふ視点がそここにあり、尽きることがありません。

ユニークだったのは三宅流コウノトリ評。野性味にあふれる猛禽類に比べそのイメージは「歌舞伎



役者風」と即答。確かに、黒くて細長いクチバシと赤系の色をした長い足を持ち、全長110〜115cm、翼間長200cmと、河川や湿原などに生息する野鳥のなかでは大型で、赤い隈取りをしたような眼や、ふわりと空を舞う様子などを思うと、その例えに思わず納得。

ただし、体重3〜5kgの優雅な姿を維持するエサは「魚やカエル。ネズミなどのほ乳類やナマズなどの大きな魚を捕食することもある」そうで、きゃしゃなクチバシの先に大きなウシガエルの足を挟んでいるコウノトリの写真などは野鳥を追い続ける三宅さんならではの眼が捉えたものでしょう。

ところで、鳴門のコウノトリのカップルは現在1組だけ。三宅さんは「秋から冬のエサが少なくなる時期の香川県に、日本コウノトリの半数ほどがフナの養殖池に集まるのは臭覚によると推測しています。今後は鳴門のピオトープ管理はカップル数を増やすための大きな望みとなるでしょう」と話します。鳴門のコウノトリのカップルが増えるためには広い視野と深い観察力で鳥たちの生態を追い続ける三宅さんのような人たちの活動は欠かせないことでしょう。



(注2) ホシガラス 星鳥と書いて「ホシガラス」。白い斑点を、星空に見立てたことに由来する。日本では北海道・本州・四国の亜高山帯・針葉樹林で繁殖。昔から登山者にはよく知られており、「岳鴉(だけがらす)」の名で呼ばれていた。

(注3) タヌキノシヨクダイ 常緑樹林の林床に生育する熱帯性の腐生植物。葉緑体を持たず、高さ3〜4mほどの花を地面近くにつける。名前の由来は花の姿がタヌキがうろつくを持って立っている姿にたとえられたもの。学名の中の「abe」は、徳島県の植物相の解明に多大な貢献をおこなった阿部近一氏を記念してつけられた。(東京大学総合研究博物館 B21 タヌキノシヨクダイ未整理標本の中から見いだされた珍奇な植物のタイプ標本より一部要約抜粋) 那賀郡那賀町沢谷にタヌキノシヨクダイ発生地がある。海外では「Fairvane」(妖精のランプ)と呼ばれている。